

スーパーグローバル大学創成支援事業 令和6年度事後評価結果表

大 学 名	東京科学大学（旧：東京工業大学）
整理番号	A06
構 想 名	真の国際化のためのガバナンス改革による Tokyo Tech Quality の深化と浸透

◇スーパーグローバル大学創成支援プログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価） B	事業目的はある程度達成されているが、今後の発展のためには努力が必要と判断される。
（コメント） 事業期間全体において、学長のイニシアチブの下で執行部・部局・事務局が一体となって企画立案・執行までを連携して行う運営体制となるよう、戦略統括会議にマネジメント体制を集約させることで、迅速な意思決定や全学の教員人事の一元管理が可能となるガバナンス改革を行った。特に教員人事に関しては各部局の将来構想に基づき全学人事委員会で既得権益なく国際公募によりポストを配分するなど、最先端研究・教育の国際水準への引き上げや人材育成に今後大きく寄与すると考えられる。 上記体制が進められた中での具体的な事業展開として、まず教育改革面においては、日本の大学では初となる、学部と大学院を一体化した「学院」が創設された。これにより学生は入学時から大学院修了までを見通せるため、自らの関心に基づく多様な選択・挑戦が可能となったことに加え、クォーター制の導入や大学院課程における授業の英語化などにより、学生の派遣・受入れを促進する体制は整えられたものとなっている。 研究改革面においては、新たな研究院や研究所、研究ユニット、研究機構等を設置したことが、国際共同研究への発展や国際研究者ネットワークの構築に繋がっており、「世界の研究ハブ」として機能する体制が構築されたと言えるだろう。 一方で、10年間の改革の結果、教育・研究双方においてどのような成果が得られたかが重要な評価ポイントであるところ、講じた施策については評価調書に多数まとめられていたが、その先の成果部分については全体的に具体性に欠け、やや希薄であった。本事業は長期に渡るものであったため、途中で経営陣の交代等があったことも一因と思われる。この経験を生かし、課題意識や取組みの意義が中長期的に引き継がれるよう、今後さらなる精緻なビジョンを描き、定量的・定性的で具体的なアウトカムの設定・実現により、グローバル指標向上のために改革の実効性を上げることが強く望まれる。 最後に、スーパーグローバル大学創成支援事業による補助期間は終了したが、令和6年10月より東京医科歯科大学と東京工業大学が統合して、東京科学大学が誕生し、新体制になっていることにより、両大学のこれまでの伝統と先進性を生かしながら、新しい大学の在り方を創出し、引き続き徹底した「大学改革」と「国際化」を断行し世界的に魅力的なトップレベルの教育研究を行い、我が国社会の国際化の牽引に寄与されることに期待する。	